研究助成 研究成果報告書（ＨＰ掲載用）

研究課題名：
ビタミンＤ摂取量・血清 25(OH)ビタミンＤ濃度と口腔機能低下症の関連

所属大学・機関名　　氏名
九州歯科大学　歯学部　総合内科学分野　　小森田　祐二

【研究要旨】（研究要旨を 200～300 文字程度でご記入ください。）
一般内科外来通院患者73名を対象として、BDHQを用いたビタミンD摂取量、血清25(OH)ビタミンＤ濃度と口腔機能低下との関連について、横断的に解析した。ビタミンＤ摂取量、血清濃度が高いほど、咬合力、舌圧、咀嚼機能などの口腔機能は高い傾向にあるものの、統計学的に有意な関連は認められなかった。

【研究目的】
ビタミンＤは生体内において、カルシウム代謝、神経伝達や筋肉、骨、歯の発達・維持に重要なミネラルであり、その不足は骨粗鬆症、糖尿病、サルコペニア等、様々な疾患と関連している。ビタミンＤの作用機序を考慮すると、免疫（齲歯、口腔衛生）、筋力（咬合筋、舌圧、嚥下）、神経（唾液分泌量）、インスリン抵抗性（歯周病）に関与し、口腔機能低下に大きく影響すると考えられるが、これまでにビタミンＤ摂取量、充足と口腔機能低下症との関連をみた疫学研究はない。一般内科外来通院患者を対象とした横断研究において、ビタミンＤ摂取量、ビタミンＤ充足と口腔機能低下症の関連を検討した。

【研究方法】
九州歯科大学附属病院内科外来に通院中で、口腔悪性腫瘍手術歴のない患者に協力を依頼し、横断研究を行った。口腔衛生状態、口腔乾燥、咬合力、舌口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能、嚥下機能の 7 項目にて口腔機能を評価し、簡易型自記式食事歴法質問票(BDHQ)を用いてビタミンＤ摂取量を評価、血液検査にて血清 25(OH)ビタミンＤを測定した。ビタミンＤ摂取量、血清 25(OH)ビタミンＤ濃度それぞれと、口腔機能低下症、7 つの下位症状との関連を多変量調整モデルにて検討した。

【研究結果】

【考察】

研究対象者の臨床的背景を表 1 に示す。平均年齢は 71.7 歳、男性 49.3%、サルコペニアは 24.6%に認めた。本研究に参加した 73 人のうち、31 人が舌圧低下と診断された。ビタミン D 摂取量が高いほど、咬合力、舌圧、咀嚼機能などの口腔機能は高い傾向にあるものの、統計学的に有意な関連は認められなかった。同様に、血清 25(OH)ビタミン D 濃度が高いほど、各機能は高い傾向にあるものの、統計学的に有意な関連は認められなかった。

【結論】

一般内科外来通院患者を対象とした小規模横断研究において、ビタミン D 摂取量・充足と口腔機能低下との間には有意な関連は認められなかった。